

Hot Line

関美那子 (体育指導委員)

国民総スポーツの時代、私の永遠のテーマは「自分自身の体力に応じた“ひとりワン・スポーツ”を、全国民に呼びかけたい」ということです。



「体育指導委員」として、子供会のソフトボール部の監督をして16年目になります。初めはボールも握るのがやっとだった子供たちの成長ぶりを見ると、その姿に励まされます。これは若さを保つための私への励ましのプレゼントだと受けとめ、感謝しています。その他、地域の人々にインディアカやグラウンド・ゴルフも指導しています。

平成4年度に設立した名古屋市守山区グラウンド・ゴルフ協会では理事長として4年目を迎えました。只今、会員332名の大所帯。区大会は大小とりまぜ年5回、行っています。

今年4月から常任理事となった愛知県グラウンド・ゴルフ協会では、広報委員長として「中地区」の事務局を預かり、機関紙や大会プログラムの作成で無我夢中の半年でした。『グラウンド・ゴルフあいち第3号』は私の新聞作り第1号です。協会運営も、大会運営も、ともかく先輩協会を見よう見まねでやってきました。9月23日には、選手・役員総勢1,200人の平成7年度後期愛知県中地区グラウンド・ゴルフ大会が終了したばかりです。ほっとする間もなく、10月22日には愛知県スポレク・フェスティバル、11月5日の県協会会長杯への選手派遣の事務等々に追われました。

さらに来年度、名古屋市を中心に開催される第50回レクリエーション大会で、グラウンド・ゴルフは中地区が主管となります。今はその大会に向けて、すでに数回の運営委員会に出席し、準備にとりかかったところです。

最近の女性スポーツで心にとまったのは、明治大学野球部の女性投手ハーラーです。成績はともかく、スポーツに対する前向きな様子がほほえましいと思います。スマートさもない投げる姿、あっけらかんとした顔、日本の女性には真似ができそうもありません。これは国民性でしょうか。私どもも不言実行に限りなく近づきたいと思っています。

“緑の下の力持ち”として、苦しみの後の楽しさが味わえる日を一人心に秘めて、これからがんばります。(名古屋市在住)

グラウンド・ゴルフとは (95年9/24=日刊スポーツ)

1982年に鳥取県泊村でゴルフをアレンジして始まったスポーツ。長さ50~100 cmの木製クラブ1本で直径6 cmの樹脂製ボールを打ち、ホールポストにボールを入れる。標準ルールはA、Bそれぞれ8ホールをラウンドし、最小打数での合計を競う。競技人口は全国で約50万人。

衣笠由香 (中学校教諭)

私は明石市立野々池中学校の保健体育の教師をしています。大学も、教職に就いた最初の職場も民主的で、社会に出てからも自分が女性だということをあまり意識したことはありませんでした。ところが2つ目の学校はどちらかといえば男性中心の職場なのです。制度上、たとえば給料等の待遇において一見、平等のようですが、実は目には見えない巧妙な男性優位の職場なのです。その中で教育を受けている子供たちにそのひずみが出るのも明らかです。学年が上がるにつれ、体力の弱い子や勉強の苦手な子、障害をもった子供たちがしんどい思いをしています。そして不登校の子供の数も増加しました。

会員の広場

そのような中において、WSFジャパンのように、弱い立場に置かれている女性が勇気を出して活動しているのを聞くと、元気が出ます。その活動力が日本の未来をつくって下さるような気がします。私の元気のもと、WSFジャパンが大好きです。(明石市在住)

帖佐寛章 (日本陸上競技連盟) 専務理事



最近嬉しかったことの筆頭は、女子マラソンの有森裕子選手の復活です。昨年度、北海道士別ハーフマラソンに出場したときは、腰が落ちたフォームで、スピードもなく、これがあの「有森」かと、目を疑ったものでした。そこでパワーをつけるために、クロスカントリーとヒルトレーニングを勧めました。ところが、10月末、小出監督から連絡があり、足の裏を痛めて走れないとのことでした。私としては非常に責任を感じましたので、三重の小山整形外科を紹介し、結局、手術ということになりました。症状はバルセロナ五輪男子マラソン優勝の黄選手と同じでしたが、周知の通り、真夏の28度の北海道で、2時間30分を切って、見事な復活。心底、喜んでいて次第です。(船橋市在住)

渡辺桂子 (学生)



今夏、通訳として'95ユニバーシアード福岡大会に参加しました。131カ国からの6,000人の選手、役員に加え、16,000人のボランティアの人々に囲まれ、貴重な経験をすることができました。

カナダチーム担当として選手村だけでなく、試合や会議などで通訳することが、私の主な仕事でし

た。そこで気がついたのは、役員には圧倒的に男性が多いということです。通訳以外には女性がない会議が何度となくありました。ある種目では男女ともに競技があったにもかかわらず、審判会議には一人の女性もいませんでした。女性に肌を出す習慣がない国々の選手のために、新体操では足首まであるレオタードが採用されるなど、女性への門戸がより開かれた今回のユニバーシアードでしたが、一方では男性だけの選手団がいくつもありました。イランチーム付きの女性通訳は、選手団の来日から帰国まで、肌を覆って男性だけの選手団に対応していたことも印象的です。

自分が選手のとときには気付かなかった、知り得なかった様々な現状を目のあたりにした3週間でした。(稲城市在住)

『第18回日本オリンピック・アカデミー

(JOA) セッション』開催のお知らせ

☆日時：1995年12月8日(金)午後1時～3時

☆場所：高輪プリンスホテル プリンスルーム

☆参加費：無料

☆講演者(予定)

①ホアン・アントニオ・サマランチ氏

(国際オリンピック委員会=IOC会長)

「オリンピック・ムーブメントの今日と未来」

②アニタ・デフランツ女史 (IOC理事)

「女性とスポーツ」

③マーク・ホドラー氏 (IOC副会長)

「オリンピックを支える財政」

ご関心のある方はWSFジャパン事務局までお問い合わせ下さい。

TEL:03-3467-4360 (担当：山本)